

ルソーの夢

——むすんでひらいて考(その十二)——

海老沢 敏

九、ルソーの夢変奏

前章で明らかにしたように、《ルソーの夢》は、讚美歌として全世界に広まり、神を讚える旋律として親しまれて今日にいたっており、そうしたかたちではやくも一世紀半もの長い生命を保ちつづけている。だが、《ルソーの夢》がひろく歌いつがれていったのは、ただひとえに讚美歌の世界に特有の現象なのではなかった。この章では、《ルソーの夢》がくりひろげていった多様な変奏に耳を傾けてみることにしよう。

第二章で、数年前におこなわれた《むすんでひらいて》をめぐる論議について触れたが、小林善彦氏のエッセイの中に、この旋律がさる英語の歌の本の中で《Days of Absence》なる題で見出される旨の情報が得られたことが記されているのを紹介した。小林氏が指摘されているのは、故宮沢俊義氏所蔵の蔵書中に、氏の母堂が東京女子師範学校に在校されておられたころ求められたと思われる英語歌曲集があり、その中に《むすんでひらいて》のメロディーが《不在の日に》なるタイトルで掲載され、しかも作者の欄には《Rousseau, 1775; Rousseau's Dream》とうたわれているという宮沢教授の教示であった。

この英語歌曲集は、表紙や扉がとれてしまっているため、発行年は不明であるが、へたぶん明治二十年以前に日本に輸入されたものであらうと考えられる。ここで問題となるのは《不在の日々》なる歌曲である。

ボストンのゴットリーブ・グラウプナーなる音楽出版部が刊行した歌曲のピース物、いわゆる《シート・ミュージック》《ヘソング・シート》に《不在 Absence》なる作品がある。そのタイトル表示を書き出せば、以下のとおりである。

《不在》 歌詞は流行歌曲《ルソーの夢》に合わせて。ボストン、フランクリン・ストリート六番地、G・グラウプナー刊（注1）
（譜例1・次頁参照）

（注1）《Absence/The words/Adapted to the favorite Air of /Rousseau's Dream/Boston: Published by G. GRAUPNER, No. 6, Franklin St.》

ゴットリーブ・グラウプナーといえは、一七九六年から一八三五年にかけて出版活動をおこなったボストンの初期における重要な音楽出版者のひとりである。この《ヘソング・シート》がいつごろ出版されたものかは確認できないが、諸般の事情をかえりみると（注2）、一八二〇年代初めから一八三〇年代前半と推定される。

（注2） D.W. Krummel(Compiled by)《Guide for Dating Early

Published Music. A Manual of Bibliographical Practices》

(New Jersey, 1974.) この書物の二三〇ページ、二三三ページ、および二九九ページ参照。二三九ページ所載のグラウプ

ナー刊の《ヘソング・シート》は一八二二年と推定されているが、これとおよそ同時期のものと考えられよう。

この《不在》なる歌曲は、《アンダンテ》とテンポこそちがった指示をもっているが、へ長調、二分の二拍子の四小節のピアノの前奏こそ、クラマーの《ルソーの夢》の主題の前半をほとんどまったくそのまま再現しており、かつ、続く歌曲の主部も、おなじようにクラマーの主題をそのままになぞって歌われるのである。主題の前半は別の歌詞をとまなづてくりかえし歌われ、主題の後半はその後楽節がすでに主題前半のくりかえしであるだけに一回歌われるのみである点はいうまでもない。音楽的な観点からすれば、この歌曲は、クラマーの変奏主題をそのままに歌曲に転用したという点で、第八章冒頭で述べた讚美歌としての《ルソーの夢》の最初の形、すなわちウォーカーの曲集の第二六五曲と同じ特徴を共有しているのだ。そうした点でも、この《不在》が、クラマーの原曲の成立年である一八二二年からさほど時間的な距離を置いていない。一八二〇年ごろに立ち現われたも

▼譜 例 1

A B S E N C E ,

THE WORDS

Adapted to the favorite Air of

MONSIEUR'S JOCKEY.

BOSTON: Published by G. GRAFNER, No 6 Franklin St

ANDANTE.

Days of absence, sad and dreary, Cloth'd in sorrow; dark ar - rays,

Days of absence, I am weary, Her I love is far a - way.

Hours of bliss, too quickly vanish'd, When will aught like you re - - turn;

When the heavy sigh be banish'd When this bosom cease to mourn

2

Not till that loved voice can greet me,
Which so oft has charmed mine ear;
Not till those sweet eyes can meet me,
Telling that I still am dear.
Days of absence then will vanish,
Joy will all my pangs repay;
Soon my bosom's idol vanish
Gloom, but felt when she's away.

3

All my love is turned to sadness,
Absence pays the tender vow,
Hopes that filled the heart with gladness
Memory turns to anguish now,
Love may yet return to greet me,
Hope may take the place of pain,
Antoinette with kisses meet me,
Breathing love and peace again.

Sold for G.G. by John. Ashton, No 197 Washington St

YARVARD COLLEGE LIBRARY
FROM
THE BEQUEST OF
EVERT JANSEN WENDELL
1918

のと推定してもあながち不当ではあるまい。

ところで、この《不在》の歌詞を見てみよう。三節からなるテキストの第一節は次のように歌われていく。

悲しくもわびしい不在の日々は

哀惜の暗い装いに包まれ、

不在の日々に、私は疲れ、

いとしいひとは遠くに去った。

しあわせの時はあまりに疾く消え果て、

君はいったいいつ戻ってくるのだらう。

いつ重苦しい吐息をつくこともなくなり、

いつこの胸は嘆きを罷めるのか。

これこそ、ほかならぬ《不在の日々》である。この歌詞が《流行歌曲》《ルソーの夢》に合わせて《歌われ、こうした恋歌として》人口に膾炙していったことは、小林氏の紹介されたように、《英語の歌の本》のかたちで《明治二十年以前に》も、日本に輸入され、女学校などでも歌われたらしいことから推察されよう。そればかりではない。前章で論じた讚美歌としての《ルソーの夢》の由来を語っている文献の中にも、「此譜は素と千七百五十二年

頃楽劇の爲めに作られたものであって、『淋しく悲しき不在の日や』という恋歌である」と、あたかもルソーの原曲であるかのようであるが紹介されていたのである。

この《不在》の歌詞は、私たちにあの《メリッサ》なる英語歌曲のそれをただちに思い出させてくれる。《メリッサ》の歌詞は、しかし、二節に亘って、ひたすらに恋人の不在を嘆くのみであったのに対して、《不在》の方は、第二節と第三節においては、恋人の不在を嘆くことから、その恋人がふたたび自分の許に立ち還ってきてくれる日のことを憧れをもって歌うという発展、展開を見せているのである。

ちなみにこの《不在》をルソーの原曲として捉えている海老沢亮編著《讚美歌歴史》は、そこから《ルソーの夢》が《多年の後》にみちびきだされ、知られるに至ったと、事実とは逆の説明をおこなっているものである。

《ルソーの夢》は、このように十九世紀の英語圏の世界で、《恋歌》として、世俗歌曲の分野でもはやされただけではなかった。すでに第五章で紹介したように、《グロウヴ音楽辞典》の第五版の《ルソーの夢》の項目の最後には、次のように記述されていた。「この曲はまた、以下の歌詞（これは譜例のリズムをわずかに変えている）がついた子供の歌としても知られている。《お

▼譜 例 2

CRADLE HYMN.

"GREENVILLE."
ROUSSEAU. DR. WATTS.

1. Hush, my babe, lie still and slum - ber, Ho - ly an - gels guard thy bed.
2. Soft and ea - sy is thy cra - dle, Coarse and hard thy Sa - viour lay:
3. Hush, my child, I did not chide thee, Though my song may seem so hard:

Heav'n - ly blessings with - out num - ber, Gent - ly fall - ing on thy head,
When His birthplace was a sta - ble And his soft - est bed was hay,
'Tis thy moth - er sits be - side thee, And her arms shall be thy guard,

How much bet - ter thou'rt at - tend - ed, Than the Son of God could be;
Ohi, to tell the won - drous sto - ry, How his foes a - bus'd their King;
May'st thou learn to know and fear Him, Love and serve Him all thy days;

When from heav - en He de - scend - ed, And be - came a child like thee.
How they killed the Lord of glo - ry, Makes me an - gry while I sing.
Then to dwell for - ev - er near Him, Tell his love and sing His praise.

やすみ、私の幼な子よ、お嬢さんのようにおやすみ／牝牛が戻ってきたら、ミルクがもらえるよ」

この記述から、《ルソーの夢》が《子守歌》、あるいはこの説明から明らかのように、《子守歌》としても知られていたことが分かるのである。こうした子守歌としての《ルソーの夢》については、典型的な実例をひとつだけ挙げておくことにしよう。一八八一年にニュー・ヨークで刊行された歌曲集に《フランクリン・スクエア歌曲集》(註③)なる曲集がある。J・P・マッカスキーなる人物が選曲編集した一六〇ページの歌曲集であるが、その二十二ページには《ララバイ》、すなわち《子守歌》あるいは《眠り歌》の代表例として、ほかならぬこの《ルソーの夢》が収められているのである(譜例②)

(註③) J.P. McCaskey (Selected by) 《Franklin Square Song Collection. Songs and Hymns for Schools and Homes, Nursery and Ahsidae》(New York, Harper & Brothers, Franklin Square, 1881.)なお、この曲集については、日本におけるルソーの夢の伝播について触れる後章で、ふたたび話題となるはずである。

この《フランクリン・スクエア歌曲集》に収録された《ルソーの夢》は《揺り籠讚美歌》と名づけられており、《グリーンウィ

ル》という讚美歌用の指示とともに、《ルソー》の名が記され、加えて作詞者としての《ウオッツ博士》の名が掲げられている。ここではまず、その歌詞の第一節を紹介してみよう。

しーっ！ 私の赤ちゃん、静かに横になって、おやすみ

聖らかな天使たちがお前のベッドを守ってくれる

天の祝福が数え切れないくらい

やさしくお前の頭にかかってくる

お前が立ち会えたのはずっとすばらしいこと

神の御子であるよりも

夫より御子が降りたまい

お前のような幼な子となりたまいし時に

この歌詞からも明らかのように、この《ルソーの夢》にアダプトされたテキストは、幼な子を眠りへといざなう《子守歌》であるとともに、幼な児イエスをたたえる《讚美歌》でもあるという性格をもっている。《グリーンウィル》の指示からも明らかのように、この《揺り籠讚美歌》は、まさに讚美歌から子守歌への移りゆきを、讚美歌から子供の歌への移行を示している典型的な実例というべきであろう。

(つづく)
(国立音楽大学)